史料紹介

安房石堂寺の中世資料について―多宝塔銘文を中心として―

佐藤博信
滝川恒昭

【解説】

はじめに

長安山東光院石堂寺（千葉県安房郡丸山町石堂）は、神亀三年（七二六）聖武天皇の勅願を奉じた行基によって開かれ、その後、慈覚大師円仁によって鎮護国家の道場として整備され、中世後期には、鎌倉府や関東足利氏、さらには在地勢力の丸氏や里見氏からも厚い崇敬と庇護を受けたと伝えられる房総屈指の古刹である。それゆえ、石堂寺の研究は、たんに石堂寺という一地方寺院のそれにとどまらず、房総・関東の寺院の歴史展開を理解するうえでも大きな意味を持つものと考える。

現在石堂寺には、その古い歴史を物語るように、関東を代表する平安仏の優品として知られる本尊十一面観音像（国指定重要文化財）をはじめ、室町期の建築とされる本堂・本堂厨子・薬師堂・多宝塔（同上）など多くの

文化財が残されている。したがって、かつては古文書などの中世資料も膨大に存在したと推測されるが、数度の火災をはじめとする災禍にしばしば見舞われたこともあってか、先述の仏像・建造物を除けば、中世以前の様相を具体的に語る資料は皆無といっていい状態である。

ただそうしたなかで、天文十四年（一五四五）の紀年を有する多宝塔相輪銘文の存在が注目される。このうち、昭和九年（一九三四）に篠崎四郎・大野太平両氏[1]によって初めて学界に紹介された露盤部の銘文は、多宝塔造立という一大事業を主催した在地勢力の丸氏やその上位にあった里見氏・正木氏、さらにはこの事業にさまざまなかたちで参画した多数の助成衆や作事関係者等々の人名・地名がみえるもので、当該地域の戦国期における多様な情報を発信する稀有な資料として高く評価できるものである。しかも近年実施された多宝塔解体修理の際、その相輪からは露盤部のみならず擦管（さつかん）・九輪や宝珠といった部分からも新たな銘文の存在が多数確認・報告されている[2]。本資料の存在が改めて注目される所以である。

ところが、そのような状況にもかかわらず、本資料は、いまだ本格的な検討がなされていないのが実情である。その原因については、後述のごとくさまざま考えられるが、中世の石堂寺や当該地域に関する資料が極端に少ない現在、改めて本資料についてより正確かつ詳細な情報を提供するという基礎的な作業が要請されていることはいうまでもない。

このような事情を鑑み、小稿では、多宝塔相輪部に認められる銘文を、新出・既出にかかわらずでき得る限り正確に紹介することを第一の目的とする。ついで、現に石堂寺に存するか否かにかかわらず、石堂寺に関する中世資料を博捜し集成することで、中世における石堂寺や当該地域を理解するための前提作業を行おうとするもの

である。

一、多宝塔相輪に所見される銘文

再言するまでもなく、本資料の存在については、つとに著名である。しかも新たに確認された銘文にしても、すでに新発見資料として一般に紹介され[3]、またそれとは別に、解体修理の際には、現在確認できた銘文のすべてを収録したとされる修理工事報告書も公刊されている（前出）。その意味では、今回の紹介はとりたてて新しい情報を提示するものではない。ただ先述のごとく、本資料は、いまだ本格的な検討がなされていないのである。

このことは、その報告書自体の入手が一般には困難といった事情も一因ではあろうが、それ以上に、報告ごとにその銘文の異同が多数所見されることが、その本質的な問題ではなかろうか。金石文特有の難解・難読さを差し引いても、この点の甚だしさは顕著である。しかもすでに指摘されているが、露盤部に所見される銘文にせよ、現在みるそれはすべて同時期に刻されたものではなく、若干の時間的差違（**追刻**）があったことが明白なのである[4]。

それにもかかわらず、従来の紹介では、この点が十分考慮されておらず、それらが混然一体のままひとつながりの銘文として紹介されてきた。そのうえ既知の銘文や近時新たに確認された銘文にせよ、それぞれが一体相輪のどの部分に刻されているのかといった基本的な点さえも、建築学の前提知識を持ち合わせない者にとっては、これまでの説明ではその要望に必ずしも応えうるものとは言い難かった。つまり、本資料は、根本資料として扱うには利用しずらい、つまり資料化するための環境整備がなされていなかった、ということが従来あまり利用さ

れてこなかった大きな要因ではないかと考える。

とはいえ、本資料中に登場してくる多数の人名・地名やそれらの相互関係が、一見しても極めて重要な情報をもたらすと判断される以上、出来得る限り客観的かつ詳細、さらに容易に理解できるような環境が要請されるのも当然であろう。

そこで、小稿では、過日現地で実物を調査した際の調査メモや、レプリカ・写真・拓本といった諸資料にあたることによって、可能なかぎり一字一句正確に銘文を紹介するようにつとめた。とりわけその核心となる露盤部に刻された銘文については、それがどのような配列・字配りで刻されているのか、またそれが追刻か否かといった点についてもひとつひとつ確認・判断し[5]、銘文全体をなるべく忠実かつ客観的に復元できるように試みたつもりである。さらに相輪部の銘文といっても、それぞれがどの部分に刻されていたのか、といった点についても図示することなどで、その理解がより容易になるように配慮した。しかもこの作業の過程で、従来見逃されていた重要な銘文も若干確認できたので[6]、それもあわせて紹介した。

二、金剛盤銘文および薬師堂・本堂厨司墨書銘

①は、密教法具のひとつ金剛盤に陰刻された銘文で、天正十六年（一五八八）九月、丸但馬守時綱の妻女が寄進した旨が記されているものである。石堂寺と丸氏が緊密な関係にあったことは、既出露盤銘などでも明らかであるが、本資料は戦国末期にいたってもその関係が続いていたことを示すものである。丸但馬守時綱は、露盤銘に丸岩糸殿平朝臣豊常の子息としてみえる時綱と同一人物であろう。なお、室町期の丸氏については関係資料が

極端に少なく、その実態をうかがうことは困難であるが、鎌倉府内でも一定の役割を果たしていたことがうかがえ、戦国期には当該地域（丸郡）において族的発展を遂げていたことが理解される。

②は、昭和四十六年（一九七一）、薬師堂および本堂内の厨子を解体修理した際に発見された墨書銘文である。それ自体極めて簡略な記事だったためか、その後に刊行された『千葉縣史料金石文篇』にも採録されず、従来まったく看過されているが、本資料によってそれぞれの建造年代が推測されるだけでなく、薬師堂（ウ・エ）では造築工事の主導的役割を果たした大工職が安田姓の人物だったことなどが判明する。この安田氏については、露盤銘にもみえる生国丹後国住人安田氏と系譜的につながる可能性も指摘される。

なお、本資料については、原資料にあたることが現状では不可能なため、すべて『重要文化財石堂寺薬師堂・本堂厨子修理工事報告書』（重要文化財石堂寺薬師堂修理委員会、一九七一年）によった。

三、古文書

①は、これまで石堂寺の関係文書としては未紹介のものである。応永九年（一四〇二）二月十三日に鎌倉公方足利満兼が彗星（すいせい）出現につき石堂寺に祈祷を命じたものである。当時彗星を妖星と称して、その出現を吉凶視したのであった。それゆえの祈祷であった。石堂寺は、当時関東足利氏（鎌倉府）の祈願寺となっていたものと思われる。なお、本文書は、明治十六年（一八八三）に安房国内の古文書所在調査にあたった調査官高橋正明の復命書たる「安房国古文書摘要」でも、すでにその存在が確認されていないので、かなり早い段階に石堂寺から流失をみていたようである。東京大学史料編纂所所蔵影写本によって、明治二十二年（一八八九）段階にはときの洋

学者にして東京人類学会初代会長でもあった神田孝平（たかひら）氏の蒐集文書になっていたことが知られる。その後（アジア・太平洋戦争後）、鎌倉市教育委員会の所蔵に帰し、現在は鎌倉国宝館に移管所蔵されている。

②は、大永五年（一五二五）十一月二十九日に入滅した石堂寺住職宗海の霊前においてその業績を称えた文書（歎徳文（たんとくぶん））である。石堂寺は、それ以前の文明十九年（一四八七）十二月、失火によって堂宇・坊舎等ことごとくを焼失したが、そのときの住職が宗海であり、本文書によれば、宗海はその責任を感じて、その後一代で全山の復興を成し遂げたという。そのことは、さきにみた露盤銘に、その時点すでに没していた宗海が大本願とみえることからも裏付けられる。なお、追記の部分では、宗海は露盤銘にも登場している丸常家の子息と記されており、ここからも石堂寺と丸氏との極めて深い関係が知られる。

③は、はやくに大野太平氏[7]によって紹介された文書で巳＝文禄二年（一五九三）に比定されるものである。喜連川国朝が亡くなったことをうけて石堂寺にいた「御ちこさま」＝龍王丸＝頼氏が下野喜連川（栃木県喜連川町）に移り、国朝の妻＝古河氏女（古河公方足利義氏の女）と再婚することとなったことを示すものである。これは、豊臣秀吉の命令によるものであった。頼氏は、小弓足利頼淳の子息で国朝の弟であった。石堂寺に小弓公方足利系の子息が寄寓していたのであった。これは、①同様に石堂寺と関東足利氏との関係の深さを示すものである。戦国末期までその関係が維持されていたことは、注目に値する。現在も石堂寺に頼氏の木造坐像（写真７）が存在している。なお、仮名交じりの本文書を発給した人物は、里見氏関係の女人と推定される。代々里見氏関係の女人によって使用された大黒朱印の印判である。同様な印判を捺した文書には、天正九年（一五八一）四月二十二日付妙本寺宛（「妙本寺文書」）などがある。

註

（1）篠崎四郎「安房国石堂寺多宝塔露盤銘に就いて」（『考古学雑誌』第二十四巻第十号、一九三四年）・大野太平「多宝塔露盤の銘につきて」（『房総郷土研究』第一巻第十一号、一九三四年）を参照。

（2）『千葉県指定有形文化財　石堂多宝塔修理工事報告書』（長安山東光寺石堂寺、一九九一年）を参照。

（3）本吉正宏「新発見の銘文ー石堂寺多宝塔銘文ー」（『千葉県の歴史』四十二・四十三合併号、一九九二年）を参照。

（4）起工式ともいうべき益形供養が天文十四年におこなわれ（資料②）、天文十七年に工事が成就した（同⑪）ことをみれば、その間に一般の助成衆・旦那衆の名前が相輪各所へ追刻されたとみるべきでろう。

（5）ただそれが明瞭な部分もあるが、追刻か否かを判断することに苦慮した部分もある。したがって、あくまでこれは現時点における叩き台であることをご理解頂きたい。なお、レプリカ・写真・拓本資料閲覧については、館山市立博物館岡田晃司氏の格別なご配慮を頂いた。また銘文の解読・追刻の判断についても、岡田氏をはじめ早川正司・遠山成一両氏からもご助言を頂いた。記して拝謝す。

（6）一例をあげれば、露盤東側面銘文中の平通綱（正木通綱）に次いで記載される実茂なる人物の脇に「弟」という注記の存在が確認された。通綱の弟、正木実茂の存在の確認である。この「実」の一字の存在は、正木氏のみならず前期里見氏（里見義実）の研究にも一石を投じる資料となろう。

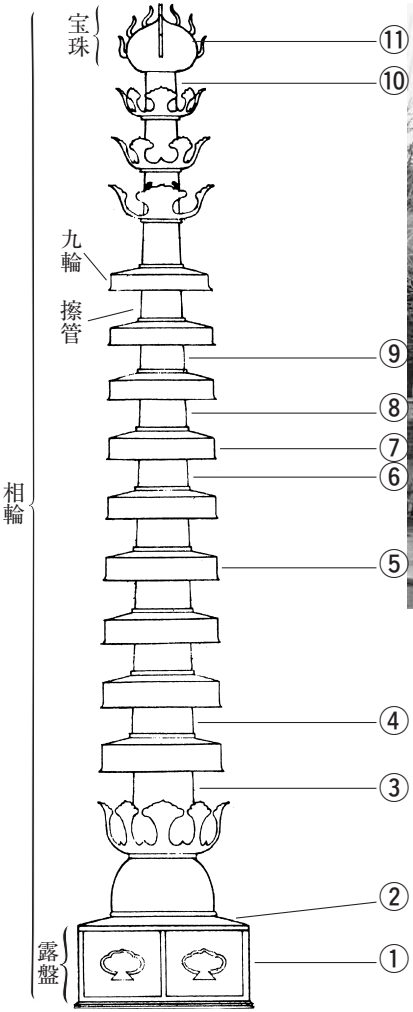
（7）大野太平「喜連川頼氏の寄寓に就て」（『房総郷土研究』第二巻第一号、一九三八年）を参照。

（追記1）資料翻刻に際しては、原則として常用漢字を用いた。

（追記2）写真版掲載に際しては、石堂寺住職坂本英海師と鎌倉国宝館の御許可を頂いた。そのうえで石堂寺関係については、一部千葉県史料研究財団所蔵のものを利用させて頂いた。併せ記して拝謝する次第である。

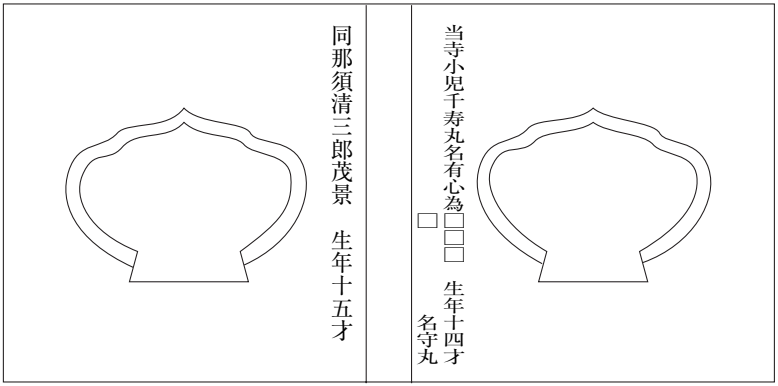
一　多宝塔相輪に所見される銘文

1 石堂寺多宝塔

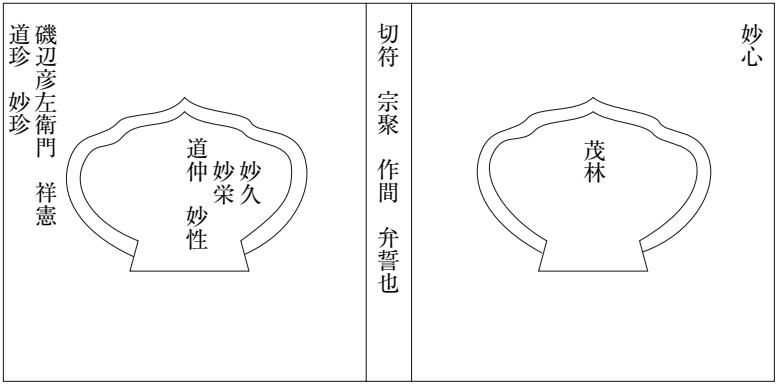


①

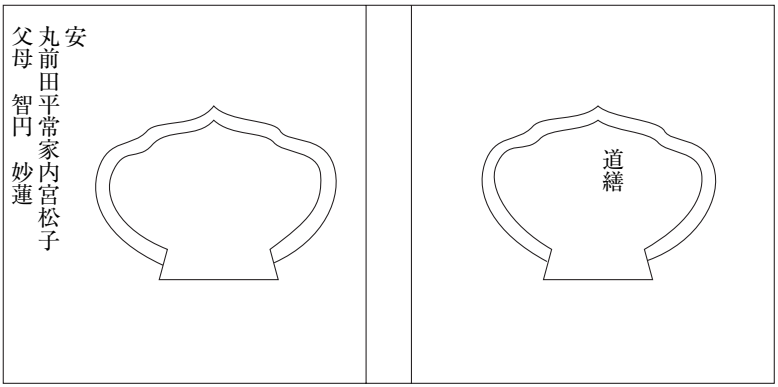
露盤北側面



露盤南側面



露盤西側面



①　**露盤北側面**

当寺小児千寿丸名有心為□□□□生年十四才名守丸
同那須清三郎茂景生年十五才

露盤南側面

妙心　茂林
切符　宗聚　作間　弁誓也
妙久
妙栄
道仲　妙性
磯辺彦左衛門　祥憲
道珍　妙珍

露盤西側面

道繕

※ゴシックは追刻と判断される文字

安
丸　前田　平常家内　宮松子
父母　智円　妙蓮

②　路盤上面

大日本国安房州丸郡石堂寺多宝塔之
益形供養畢
天文十四年乙巳十一月廿八日
百文妙祐
国主源朝臣里見
義堯
其子義舜
当地頭里見源迎
其子堯俊
軍代平朝臣
正木大膳亮時茂

大本願宗海法印
大本願聖生国山城一重住侶
真鏡・小仙・宗感
小仙行覚
妙観・妙蓮
妙照
当別当権大僧都法印宗繁
宗聚・道香・妙鏡・妙慶
宗位・妙盛・妙感
大旦那丸咒師谷殿
平朝臣常綱内妙隆尼
其子豊綱弟常種内
逆修妙芳
道光　妙光
柱三本・妙光
丸殿平成常内　妙春尼
其子蔵人佑高常

先代国主源朝臣里見
義通
其子義豊
沙弥正器慶円
平通綱 弟 実茂　**妙安比**
馬一疋　**宥泰**
太刀一正秀・平通次　**慶祐**
澄俊・妙俊
馬一疋原修理亮　同氏女
太刀一原左京亮　**玄説**
丸永興寺　道林
馬一疋光明寺　**十疋海蔵　道盛・妙光**
妙順
百疋 上総 泉水寺直申法印
丸道綱
百疋行元寺豪覚法印

千疋東長寺大厳和尚
十疋周真性善・**楽臣**
丸宮下殿平常家其子
千疋四郎左衛門　常近

俊慶

宗範・道円・妙松
千人夫食　仁ケ浦　右馬四郎
百人夫食山田五郎衛門
丸石堂殿平常茂内妙源

妙義・妙金

慶順・慶胤　道心・妙円

妙順・宗儀

太刀一振
丸岩糸殿平朝臣豊常其子

時綱　**妙清**

宗清

宗珠・宗祐・宗弁・道蓮・妙栖

道永・道珍・妙鏡
妙性・道覚・藤兵衛・大子・妙海
妙香・正本・妙心・妙弘・宝桂庵・妙性・常胤
宗義・妙弥・道心・妙心・道秀・妙心・善恵・妙法
宗祐・宗全・宗賢　弁誉・覚林
鍛冶通田新衛門　宗都・妙聖・宗伝
宗闇
道海・妙海
同内
正栄・妙栄・田六・孫兵衛　道栄
（ママ）
正仙・妙西・宝西・妙厳・妙源　妙栄
妙高　妙信
青木藤左衛門
大工小定源左衛門
大工生国遠江住人道祐
大工生国丹後国住人安田
智覚　孫衛門子孫二良

道安　　妙性

宗高・妙源・道讃・朱米・道久・妙林・道宥

弁誉・道讃・妙秀・妙照・妙了・平子大良

仲□・妙慶・松山弥五郎・宗珎・道泉　妙祐

門伝　原図書助堯頼　妙円

③　擦管　最下段

道本・妙秀

妙牲・高橋・渡辺

妙元・八郎衛門・正音・妙珍・道讃・道讃

道金・妙泉・正善・妙善・妙性

善高・妙春・道信　　小仙道泉

宗円・道円・妙観・宗珍　　道仙

祐威

宗信
勝福寺・柱一本・神余お加十疋俗一、二百文座頭衆
松寿

④

擦管　上より八段目

竹宗
祐清
宗栄律師
咫
河田道順・五郎子・菊房子・逆修松子・道永・常蓮
小田道華・妙椿・宗儒成仏・妙香
宗弁・道光・妙善・道林・善仲・三良衛門・五良四良
大神宮巌兀脇藤衛門・根本木工助・五良左衛門・大良左衛門
處兵松子美房大子河先道八
長幻妙ウし子千世代・道信・神衛門
久長吉井光阿弥寺処大良大良衛門・弥兵衛

西蓮坊道観・道明・妙清　道本・利慶・善長
円通寺道永・妙真・道徳
徳用
興珊妙秀小三良処一視手子為二親妙林
霞右妙芋道信道仲妙泉妙性明源
妙春妙源宗印妙鏡正金隼人道員
處子小躍左衛門二郎・村田四良三郎
村田左衛門・向佛道善妙心珍衛孫三郎
妙泉・妙説・妙春・三次郎・道栄

⑤　九輪　上より六段目

百
宗賢
道仙・道仲
部屋道薫
鶴子・妙香

彦五郎
青木源左衛門
請寿妙真
妙印・妙海
道珍・妙金・道連
道林・亀大郎
仁公・亀牛子
妙善・正清
宮子・道光
慶光処子
妙心・道珍
妙春・正仙
祐慶弟子
大郎子・二郎
妙音・正玄
徳書記為二親
性春・妙花

妙秀・道順
道仙・賢順
永西・六了
妙泉・菊子
円春・行人
松子・宗円
妙祐・善阿弥・妙順
妙順・妙慶
妙元・妙印
道印・妙心
妙順・若房
妙性・道性
妙仙・道仲
為二親道林

⑥　**擦管　上より四段目**

妙蓮・道玄・周一・妙仙・妙金処子・彦六・道範
妙範・道音・常林・妙隆・妙薬・道泉・妙栄・宗泉
妙芳・鶴子・大郎・道正・道牲嫁・二郎・太郎
妙仙小二郎　妙春・朔子・五郎・二郎・五郎・塙子
二郎・妙仙・鶴房・ハセカハ　母道勝・妙清道女
妙林・道善・妙心・道順・市松・常珍赤子
道印・妙祐・小仙林香・道仙　赤子・妙栄
妙印・道林・須賀茂你七妙印・正源・妙順
善鏡・宗吽・道了・妙了・妙祐・胤秀
勧進大鼓打宗順・大郎・妙正
郷庄天徳院宗富

⑦　**九輪　上より四段目**

宗賢・祐珍
常柱

妙芳・菊寿
道玄
妙仲・道円
妙鏡・妙永
道善・妙観
道善・宗方
念阿弥・道永
妙挂・明了
正善・妙善
道牲・妙㚟
妙林・妙牲
道善・善春
能阿弥
道印・善高
道永・妙久
妙正・妙印
了仙・妙照

正金・妙円
妙仲・妙金
道蓮・妙蓮
光伝・妙讃
美濃・道椿
妙泉
輪一勧進
礒辺彦左衛門
松子・五郎
妙元・新衛門
籾子
正林
妙仙・道仙
正挂・道永
妙隆・道讃
無産牛
玄清・妙光
妙心・大支

正祐・道順
太郎・美濃
妙胤・真宗
妙連・妙秀
昌寿・三位

⑧　擦管　上より三段目

妙全
松子・吉秀・菊子・鶴子
妙印
土道安　妙芳
妙鶴
妙仲
宗感

⑨　擦管　上より二段目

益子
千代　分造次良　六良子

妙泉

円徳・妙讃・妙薫・性春・妙音・道仙・妙金

妙香・道徳善旅宗ふ手手、房道随

宗円・妙印処子

⑩　宝珠（芯部）

重常

正秀　妙仲

塔　百性　馬一疋　二郎兵衛

妙祐

道幸

妙香

宗連

⑪　宝珠（頭部・写真3）

三原郷大工常久戒名宗当

成就于時天文十七年戊申十一月廿弐日

二　金剛盤銘文および薬師堂・本堂厨子内墨書銘

①　金剛盤銘文　縦二七　横一九・二

（陰刻銘）

奉奇附（ママ）仏具一面

石堂寺江爲現世安穏

後生善処故也

旦那丸但馬守時綱妻女敬白

天正十六戊子季九月吉日

②　薬師堂墨書

ア　隅木上墨書

慶長拾五□年三月十二日い[つ][し]く[□]いづれもこれを[□]

イ　内陣台輪墨書

天正三年乙丑六月[□]

ウ　丸桁落掛墨書

大工安田□□□

天正三年乙い六月五日

エ　巻斗斗尻墨書

作者安田[ゆ][起]□

同□斗助

天正三乙い六月　☒

三日本願敬白

③　厨子内側壁板墨書

延[海]敬白宮殿□□□

永正十年癸酉七月□十一月廿二日

三　古文書

①　鎌倉公方足利満兼御教書（写真4）

彗星出現祈祷事、殊可令致精誠之状、如件、

応永九年二月十三日　（足利満兼）（花押）

石堂寺別当侍従律師御房

②　宗海歎徳文（写真5）

于時文明十九年丁未戊戌極月十四日夜、於妙法坊夜盗、災火忽燃起、類火来堂塔・僧坊・社頭已下、悉焚燃云云、于時宗海廿五云云、爰和尚従七歳備学頭職位、然間企再興元由、纔廿余年中、堂塔・僧坊・社頭成就畢、殊寺領三百余才得退、是又国伺順源朝臣義通大将得敗領、就中法道悉破壊、其時之分野、寺中之僧侶官俗形無究、不及事、嗚呼歎有余計也、此法印志等、慈覚古仏法伝来之励、邂逅不廃、依之所願不空、感応道交而、極顕密之奥蔵、法流遠沾末代之乾田、師資相承之藻鮮結簡、以広演流布、実仏使之為人師、雖然与携有為之教意六十才、大永五乙酉潤廿

九辰剋入滅畢、□(粧カ)者帰双林之苔、百余之弟子之悲涙者、咽提河、併崛東頭山行元寺法印豪覚和尚奉荼毘処也、

当住権少僧都宗能
同祖父宮下常益・常家
孫子常定・常近・心仲
祥玉尼

大永五暦乙酉霜月晦日

惣領成常・祥順・呪師谷常総
宗秀律師・宗繁・慶円・綵色大工宗意其子房子宗茂

③　里見家女人印判状（写真6）

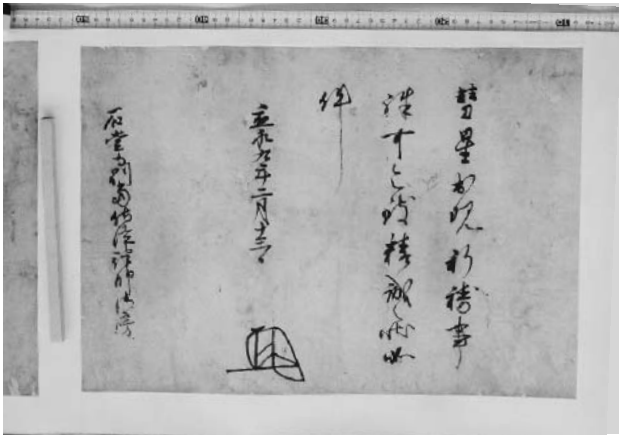
御ちこさまきつれ(喜連川)かはへ御うつり候につゐて、其寺家ににあひのかたしつけ申候間、いつものことく御うつりあるへく候、御ちこさま御在寺のうちの御しやくもつの事をは、けんみつに御すましあるへく候、そのために印判をこしまいらせ候、以上、

巳
六月十三日　（朱印、印文「久榮」）

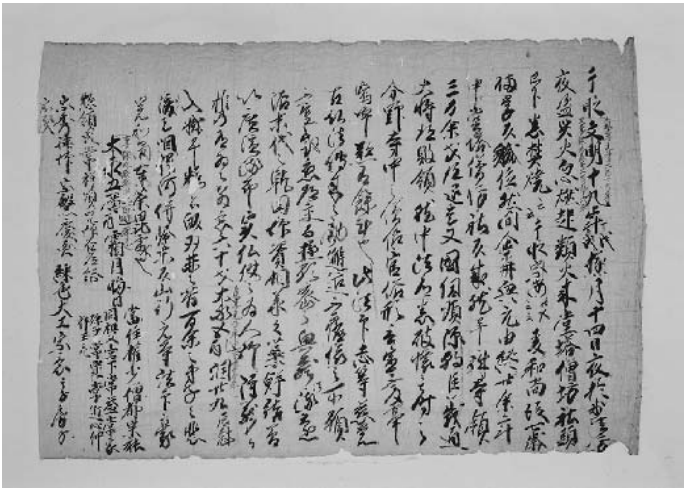
石堂寺
御ゐんきよへまいる

2 露盤上面銘文（部分）

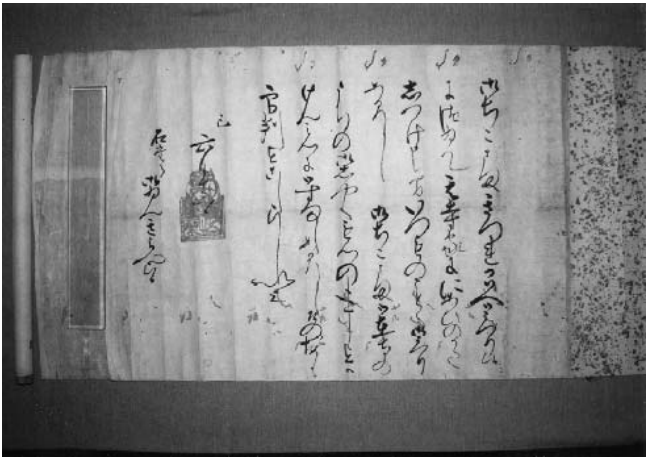
3 宝珠（頭部）銘文



4 鎌倉公方足利満兼御教書



5 宗海歎徳文



6 里見家女人印判状

7 足利頼氏木造坐像